
鈴音は悲しく響く

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴音は悲しく響く

【Zコード】

N7771P

【作者名】

帆立レノン

【あらすじ】

娘を病氣で失った『俺』は、全てに絶望していた。

絶望を抱いたまま歩き��けていると見た事の無い田舎に着く。

そこで出会う『すずね』と名乗る女の子。自らを『終わった者』と言つ不思議な女の子。『俺』と『すずね』はどんな物語を紡ぐのか。
貴方の大切なモノはどこに有りますか？

前編「鉛音に誘われて」（前書き）

全3編の予定です。『貴方の青春を教えて下さい』と同じ舞台のお話です。最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

前編「鈴音に誘われて」

「鈴音が悲しく響く」

前編「鈴の音色に誘われて」

雨が降っている。

土砂降りな雨は止む気配は無い。

俺は虚ろな眼差しで歩き続ける。

雨は止む気配は無い。

先日、俺の娘が死んだ。

妻を早くに亡くし、妻の分まで愛していた娘が死んだ。

何よりもかけがえの無い娘が死んだ。

病氣で死んだ。

何を恨めば良いのか？

事故ならば相手を憎めば良い。

殺されたなら犯人に復讐すれば良い。

でも、病氣は憎めないし、復讐も出来ない。

何も……出来ない。

……ただ歩く。無心に何も考えずに。

……そうすればきっと娘に逢えるから……

雨が、止んだ。

どれくらい歩いたのか、見た事も無い田舎に着いて居た。長閑な場所だ。

山が見える。美しい紅葉が目に入る。俺の足は自然にそちぢりに向かって歩き出した。

そして俺は山を登り始めた。

何を思つたのか分からぬ。けど俺の足は止まらなかつた。

山は急勾配と言つ訳ではなく、緩やかだ。

そんな事を思つてゐると……

ちりん。

甲高い涼やかな音が俺の耳に響いた。

鈴の音?

ちりん。

音のする方向に俺は歩いた。何かに導かれるようになつた。

ちりん。

一際大きくその音が鳴つた。音の方向を見るとそこには、

ちりん。

「…………！」

女の子が居た。娘と同じぐらいの十にも満たないであろう女の子。地面の方を見て俺には気が付いていないようだ。何かを探している？

「む…………」

「…………っー？」

女の子が俺の方を向いた。可愛いらしく、使い古された言い方をするところ人形さんのような顔立ちだ。和服を着ている為、更にその印象は深くなる。

髪飾りなんか彼女の頭には鈴がついていた。先程の鈴音はソレだつたようだ。

「…………む。誰だお前は？ 人の顔をじろじろと見て、鈴を思わず高い可愛いらしい声だった。

どうしてこんな山奥に女の子が？

「え？ いや俺は…………」

「ちょうど良い。手伝え」

そう言つと女の子は再び、地面に目を向け始めた。

「手伝えって何を…………？」

「見て分からんか？ 栗拾いだ」

「栗拾い？」

「そうだ。栗、美味しいだろ？」「

よく周辺を見渡して見ると、確かに栗が点在していた。秋と言つ

実りの季節だけある。

そして、女の子が集めたであろう栗が沢山入った籠もあつた。

「拾つた栗はその籠に入ってくれ」

「…………」

言われた通り、俺はそこらにある栗を拾い始めた。

「何で栗を拾つてるんだ？」

俺は女の子に聞いてみた。

「栗は美味いだろ？ 栗ご飯。栗きんとん。モンブラン。ああよだ
れが止まらん」

和洋折衷だつた。

「いや…… そうだけど。だからつて一人で山奥に居るのは危なく無
いかい？ その熊とかにで会つたら」

「危険な動物はあまり居ない。それにわたしは一人では無い」

「？ お父さんとお母さんと来て いるのかい？」

「 そうでなければこんな山奥に女の子が一人で居る訳が……

「そんなモノは居ない」

あつけらかんと、さしてそれが当然、当たり前のようにやつて言つ
た。

「…………それつて、どうこいつ事…」

「？ 何をそんなに驚いて いる？」

「それはっ。驚くだろ…」

思わず大きな声を上げる。俺の声がうるさかつたのか、女の子は
不快そうに眉をひそめる。

「急に大きな声を出すな
「だ、だけど」

何故俺は、こんな奇妙な女の子にこんな事を言つて いるんだろう。
娘とは似ても似つかないのに……

「居ないモノは居ない。知らないモノは知らない。元から居ないモ

ノは知りよつが無いだろつ?」

元から……居ない?

「わたしは、『終わつた者』だからな
終わつた……者……?」

「この女の子は、一体?」

「……ちゃん」

遠くから女の声が響いた。

「む……この声は……」

「すずねちゃん? 何処ですかあー?」

遠くからやつて来たのは16～18歳くらいの和服を着た少女だ
った。

「あつ! ここに居たんですね。すずねちゃん」

「しぐれか……」

「全く……駄目じゃないですか! 勝手に旅館から出て、皆心配し
てましたよ! 大変だつたんですよ!」

しぐれと呼ばれた少女は、女の子(すずねと書ひひじこ)にまく
し立てる。

「すまんな。しぐれ。栗を拾つていたら、思わぬモノを拾つてな
そう言つてすずねは俺を指差す。

「あれ? 貴方は?」

不思議そうな顔をして首を傾げる少女。

「あ……俺は」

「あつ。お客様ですねつ! ですよね! ではござ内致しますー!」

違うと詰つ暇無く、腕を引っ張られる。

「え、ちよつと……」

「……」

すずねは、そんな俺をくすりと笑い、

「白雲旅館によつこそ」

そんな事を言つた。

中編「夏色の幻想」

中編「夏色の幻想」

「蝉つて儂いと思いませんか？」

「えつと……何を？」

娘のみすずは唐突にそんなコトを言つた。俺は縁側で庭に佇むみすずを見る。病弱なみすずが外に出るのは珍しい事だつた。みすずが唐突なのはいつもの事なので俺もいつも通りに返す。

「蝉の成体の命は二、三週間程度だそつです」

「まあ知つてるけど……」

幼虫や蛹の状態では数カ月以上地中に居るけど外に出たら数日の命なのだ。

「騒がしい癖に儂いんですよね。……数日の命と知つても彼らは鳴き続ける。彼らは何を思つているんでしょう」

「…………」

みすずが何を言つているか俺には分からぬ。

「きっと彼等は叫んでいるんだと思います。自分達は生きているんだけど。ここに居るんだと。短い命と知りながら」

喧しく叫び続ける。

ここに居ると。

私はここに生きていると。

そして残すのだ。

生きていた証を。

「みすず……？」

「私も……ここに留ます。蝉みたいに叫ぶ事は出来ないけど私はここに生きているんです」

みすずの声が遠くなつていぐ。そしてその姿も。

「待つてくれみすゞー、『口』に行くんだーー？」

「私は、ここに『口』ます」

そしてその姿は……強き消えた。

田覚める。現実に引き戻された。

「みすゞ……？」

田の前に居たのは無表情な女の子……昨日の女の子だった。

「誰だ？　それは？」

「　ツー？」

慌てて起き上がろうとしたが、女の子は俺に乗っかっていたので身動きは出来なかつた。

「おはよっ」

「え……ああ、おはよっ」

「一体どうなつてるんだ？」

「ふむ……混乱しているようだな。落ち着いて深呼吸だ」

「……」

俺は言われた通りに深呼吸をする。その間に頭も覚醒していく。
そうだ昨日……この女の子　すずねりせんに会つてそれから……

「ち、ちゅうとーー？」

「？　何ですかお客様さん？」

「俺、金とか持つてないですよー？」

「それならお代は結構ですよー」

「……」

「も、もしかして……泊まるの嫌ですか？（涙声）

「おや……泣かせてしまつたな

「……」

と言ひ強引な流れで俺は「いー」、白雲旅館に泊まる運びとなつた。

疲れていた為昨日はすぐ元寝てしまつたのか……

「……落ち着いたか？」

「うん……とりあえずどこでくれないかな？」

「ふむ……重いか？」

「いや……そつぱつわけじや……」

「ふむ」

そう呟き俺から下りるすずねちゃん。一体何がしたかったんだ？

「モーニングコールだよ

頼んで無い。

「美少女のモーニングコールだぞ？」

「……」

自分で言つ까？

「もう少しこの矮躯が大人であればセクシイなモーニングコール出来るのだがな……残念ながら犯罪になつてしまつ。それでも良いと言つなら……」

「お願ひだから止めて！」

着物を脱ぐとしたすずねちゃんを必死に止める。

「ふむ。冗談だ……」

なんかその言葉には残念そうな雰囲気があつたのが恐い。

「よつと」

身を起こす。服はこの旅館の浴衣だ。

「さて……起きたなら『李の間』に行くとするか。恐らく朝餉の用意は出来てゐるだろ？ からな」

「……」

昨日から思つてたけど古めかしい喋り方をする女の子だなあ……

キヤラ作りなのかな。

「そんな訳なかつ

「……つー？」

「心を読まれた！？」

「軽い読心術だよ。頑張れば誰だつて出来る」

「…………」

本当に……この女の子は何者なのだろうか？

李の間。畳張りの広間のようだ。紅葉の美しい中庭が見渡せるようになつた。

目の前には旅館の割りには質素な朝食だった。まずは秋刀魚の塩焼きがあつた。傍には大根おろしもあつた。後はみそ汁にほうれん草の胡麻和え。後は漬物だった。

「お待たせしました」

良い匂いと共に茶碗とおひつを持ったじぐれさんがやつて来た。この匂いは？

「もしかして栗ご飯ですか？」

「はいっ。そうですよ。よく分かりましたね」

昨日すずねちゃんが拾っていたモノだらうか？

「それではどうぞお召し上がり下せー」

「それじゃあいただきます」

早速みそ汁を啜つてみる。

「！ 美味しい……」

よく見ると様々な茸が入つていた。よくダシが効いていてとても美味しい。

そう言つとじぐれさんは顔を嬉しそうに微笑んだ。

「よかつたですっ」

「栗ご飯も美味しいですね。じぐれさんが作つたんですか？」

「はい……粗末なモノですが……」

「そんな事は無いですよ。とっても美味しいです。その……田舎を思ひ出します」

「じぐれの料理は古臭いと？」

「違うから！ 変な所で入つて来ないでよ」

「……私の料理は、田舎臭いですか……」

「違う！違いますから！涙田にならないで下せこー！」

「必死のフォローだな」

「すずねちゃんもいい加減にしてー。」

「冗談だ。しぐれもいじけるな」

「いいんです。いいんです。私なんて田舎に帰ればいいんです。とかぶつぶつ呟き始めたしぐれさん。

「ふむ……やり過ぎたか？」

「……」

「アレは放つて置いて食事を続けた方がいいのでは無いか？」

「……いいのかな？」

「冷めてしまうだろ」

「……」

仕方ないので再び食べ始める。

「なあ」

「ん。何？すずねちゃん」

「その栗……旨いか？」

「？美味しいよ。凄く」

「そうか。よかつた」

そう言つてすずねちゃんはほんの少し嬉しそうな顔をした。

そつか。この栗……

「やっぱすすねちゃんが拾つたモノだつたんだ」

「む……」

「ありがとう。すずねちゃん」

「む……褒めても何も出んぞ？」

そう言つとすずねちゃんは顔を赤らめて顔を逸らした。

それは表情はとても微笑ましかつた。

「散歩にでも行かぬか？」

朝食後。部屋に居るとすずねちゃんが入つて来てそんな事を言つ

た。

「俺とい？」

「他に誰が居る？』

断る理由は特に無い。

「うそ。いいけど……」

「なら行こう」

そう言つてすずねちゃんは俺の手を引いて歩を出した。

「なあ」

「ん？ 何？ すずねちゃん」

「貴方は今幸せか？」

「え……」

すずねちゃんはひとつとそんな事を聞いた。すずねちゃんの顔は見えない。

幸せ……俺は失つてしまつたから……分からない。

「……私達は『終わつてしまつた者』だ。だが貴方違う

「…………何を、言つて」

「行こう。貴方の幸せを見つけに」

後編「鈴音は悲しく響く」

後編「鈴音は悲しく響く」

みすずはもう居ない。何処にも居ない。

「だから何もかもがどうでも良かつたのか？」

「ああ。だから俺は死にたかった。死ねばみすずに逢える。そう思つた。だから嬉しかつた。

「死ねる事が？」

「ああ。目の前にトラックが現れた時……死ねると思つた。でも……成る程……貴方が何故ここに来た理由が分かつた」

いつの間にか田舎みたいな所に居て……そして君達に会つた。

「…………」

「ここは温かい。君達みたいな人が居て長閑で平和で何一つ不安を感じなかつた。

「ここ……白雲旅館はある意味楽園だ。美しい自然に、美味しい食べ物。悩みを忘れ、やがて全てを忘れ消えていく……とても優しく悲しい場所だ」

俺は。

「私はしぐれのように死ぬなとか、ここから出ていけなどとは言わない。貴方が望むなら……」

「永遠にここに居ても良い。

「…………」

「そう俺が言つとすすねちゃんは頷いた。
ちりんと鈴音が悲しく響いた。

「…………だが、それは本当の幸せでは無い事を私は知つている。
忘れる事は逃げる事……せやかしの夢に漫り消え行く事を貴方は望むのか？」

俺は、どうでもいい。みすずを失った日から俺の時間は止まつた。

「そりゃ。なら私は止めない。だがその前にいくつか質問が有る」

質問……？ 一体何を……

「ここに来る者は迷いの有る者だ。死ぬ事に迷つてゐる者だからだ」

俺が迷つてゐる……？ 何を……

「貴方の娘は……果たして不幸だつたのか？」

当たり前だ……短くして死んだんだ。

「貴方の娘は……貴方が死ぬ事を望んでいるのか？」

それ、は……

「貴方の娘は最期……今際の言葉は何だつた？」

その言葉に俺の記憶が蘇る。

病室のベッドの上。苦しくて痛くて仕方ない筈なのにみすずは笑つていた。

『お父さん……皆は私を不幸だと言ひます』

『でも私は……そう思いません』

『だつて……』

『頼りなくて、平凡で、さほど恰好も良くないけど……』

『素敵なお父さんが居たのですから』

『私は……死んでもお父さんの中に残ります』

『私はここに居ます』

『私は……私は』

『幸せ……でしたよ』

「少なくとも貴方の娘は笑つていたのではないか？」
「そう……か。忘れていた。みすずを失った事が悲し過ぎて……」

みすずの想いを。大切な事を忘れてたいた。本当に大切なモノ……
みすずは心に。
ずっと……居てくれたのか……みすず！

俺は白雲旅館のHントラансにいた。チェックアウトをする為だ。

「やつぱり俺……帰るよ。みすずが待ってる」

そう俺が言うとしぐれさんとすずねちゃんは微笑んだ。

「はー！」

「見つけられたようだな」

彼女達は一体何者なのだろうか？

「私達は只の旅館の女将ですよ」

「そして私はお手伝いさんだ」

「ははは。そうなんだ」

俺も笑った。久しぶりに笑った。そつか……いつやつて笑うんだ
つけ。

「お客さん三つ……約束して下さー」

「ああ。分かつた」

「一つ目は……私達の事を誰にも話さないで下さい」

「うん」

「二つ目は……絶対に振り向かないで下さい」

「うん」

「最後に……私達の事……忘れないで下さい。時々……時々でいい

です。私達の事を思い出して下さい」

「……。ああ。絶対に忘れない」

そして。俺は歩き出した。振り向かない。もう一度逢えないと分
かっていても。

「さようなら。ありがとう……すずねちゃん」

ちりんと。鈴音が悲しく……嬉しそうに鳴り響いた。

大切なモノはきっと……案外近くにあるのかも知れない。

そんな簡単な事だった。

後編「絶命は悲しく響く」（後編や）

全3部の予定でしたがHピローグを含めて4部に変更します。最後までお付き合って貰えれば恐縮です。

Hピローグ「Hにいる大切なモノ」

Hピローグ「Hにいる大切なモノ」

「いりー あんまり遠くに行かないー。」

「それなら、追ってきなよー」

「せんせーのノロマ～」

「な、なんだとお～」

「わ～」

我先にと逃げていく子供達。流石に子供は元気なモノで速い速い。

「はあ……」

「大変ですね～」

同僚の先生が話しかけてくる。

「他人事だと思って……」

「ふふ……良かつたです。元氣そうで」

「そりや子供は元気だよ」

「違います。植村先生のコトです」

「俺の事？」

「その……色々大変だつたじゃないですか……」

言い淀む先生。恐らく俺の娘が死んだ事、そして俺自身が交通事故に遭つた事を言つてゐるのだろう。

「娘さん……お亡くなりになられてから凄く憔悴されて……あのままこの幼稚園の先生辞めちゃうんじゃ無いかと思つて……皆心配してたんですよ。そして事故に遭つたつて聞いた時には……」

「…………めんね。心配かけて」

あの日……白雲旅館から帰つた時、気がつくと病院のベッドの上に居た。

一週間も意識不明だったらしく。

目を覚ました時近くにあったのは子供達の作ってくれた千羽鶴だった。

本当に俺は情けない。沢山大切な事があったのに……

「教えてくれた人が居るんだ」

「誰……ですか？」

「優しい人達。大切なモノは……近くにあるって……

「素敵な方達なんですね」

「ああ……」

本当に優しい人達だった。元気なしぐれさんに。素直じゃないけど優しいすずねちゃん

俺は絶対に忘れない。絶対に……

「せんせえ？」

子供達の一人が俺に近づいて来た。

「これ……あげる

ちりん。

と鈴音が女の子の手の中で鳴った。

「プローグ」にある大切なモノ（後書き）

時間や大切なものはいつの間にか無くなり、いつの間にか手に入つてゐる物だと思います。近くにあるようで遠く。遠くに有るようで近く。貴方の大切なモノはなんですか？

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。
感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771p/>

鈴音は悲しく響く

2011年3月1日14時56分発行